Title	『うつほ物語』の君子:「君子左琴」の思想および仲忠と正頼の政治性をめぐって
Author(s)	戸田,瞳
Citation	国語国文研究, 148, 1-14
Issue Date	2016-03-07
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/89222
Туре	article
File Information	Kokugokokubunkenkyu_148_01-14.pdf



『うつほ物語』の君子

「君子左琴」の思想および仲忠と正頼の政治性をめぐって

即 はじめに

第

琴を携えているべきであるという、「君子左琴」または「右書左琴 中国には古来、右に見られるような、君子たるもの傍らには常に 時孰、 琴瑟一。 君無」故、 故天子之爲」樂也、 昔者舜作,,五弦之琴,、以歌,,南風,。夔始制,樂、以賞,,諸侯,。…… 懼,世亂煩,。進往遇ゝ害。不ゝ若,身安,。左ゝ琴右ゝ書。 亦在;;其中;矣。……頌曰。於陵處¸楚。王使¸聘¸焉。入與¸妻謀。 妻曰。夫子織、履以爲、食。非、與、物無、、治也。左、琴右、書。樂 然後賞」之以、樂。故其治、民勞者、其舞行綴遠、其治、民 其舞行綴短。 玉不」去」身。大夫無」故、不」撒」縣。士無」故、不」撒, 以賞,,諸侯之有,,徳者,也。徳盛而教尊、 《『古列女傳』巻二・賢明傳・八二~八三頁》』、1書。不ゝ若..身安, 。左、琴右、書。爲、人濯(1) (『礼記』楽記·四二七~四二八頁) (『礼記』曲礼下・一一一頁) 五穀

田

瞳

思想が根付いていた。目加田さくを氏は、

君子左琴、右書左琴は知識人官僚の間に、更に広く君子たるも養人の間に通念となっていたのである。従って、士君子たるものが、志を遂げて官途に就くを得た場合には、琴は天下の政治に役立つが、又不幸にして意を得ず、逆境に沈淪した場合、又為政者と容れず、山水に隠遁し悠々自適の境涯にある場合にも、その志情を寓してその身の孤高を支持し、清節を保持せしめるのが琴であるという思想は、桓子新論、達則兼善天下無不通暢、窮則独善其身而不失其操、以来諸書に引用を重ねる毎に確乎たる金言となった。

人ならぬ、琴に堪能なる有能の君子隠遯の姿、所謂「君子左琴」の想をめぐり、三条京極に隠居して琴に明け暮れた俊蔭の造型を、「伶を指摘している。氏はその上で、『うつほ物語』の「君子左琴」の思想が適用されるという、この思想の二面性と、「時をえた為政者」のみならず「時をえず隠居の君子」となった

た中国の士君子の姿勢が、そのまま移入定着したものである」とし 私的な面、 伶人として召される事を拒否し、操を持し孤高をほこっ

な権力の獲得の手段として用いている」とする。 どを指して、「秘琴披露によって政治世界に入り、秘琴披露を政治的 を禄として与えられた神泉苑での弾琴(吹上・下巻・二八九頁)な たとえば父兼雅に強いられた弾琴(俊蔭巻・五六頁)や、 ると指摘している。氏は仲忠と政治、そして琴との繋がりについて、 るのか。柳瀞先氏は目加田氏の論を踏まえて、仲忠がその人物であ 方、「時をえた為政者」の琴は、いかなる人物によって体現されてい 者の琴が俊蔭によって体現されているとするならば、 さて、『うつほ物語』 において、「時をえず隠居の君子」となっ 肝心のもう一 女一の宮

仲忠と正頼が、政治世界においてそれぞれどのような道を歩んでい その上で、彼らが琴をめぐってどのような関係を築き、 なわち、仲忠、 再検討も含め、 と位置付けることは、 それらの場面における仲忠を、ただちに「時をえた為政者」 その描かれ方について探っていきたいと思う。 正頼、皇室の人間を俎上に乗せた考察を行いたい。 作中において為政者と呼び得る可能性を持つ者、 果たして適当であろうか。本稿ではこの点の また、 す

為政者仲忠と「君子左琴」

御世になりなむとすめり。世の人は、伯父おとど、 「梨壺は、 さても知らず。 ただ今、世は、 右大将親子の わが身より

> 故郷は、 ひかあらむ。 適ひ給へば、 靡くやうなるなり。 にもあらず、 始めて、 皆足末なり。例は、さる筋にもあらず」。 皆靡き果てにたり。それは、 我も、 自然に、恥づかしきによりて、 かのぬしたちもちて、『これを』と申さば、 口開くべくもあらず。中宮はおはします。 宮は内裏に従ひ奉り給ひ、 かの君の押し立ち悪しき 人の、 内裏は右大将に 心を遣へば 何の疑

のは、 以降のことだという点である。 かしながら、先に述べた柳氏の論を検討する際に失念してならない 物語の後半、帝や春宮からの絶大な信頼を得るようになった仲忠 たしかに政治の中枢に近づきつつある人物として語られる。 彼が為政者の側面を強めていくのが、 あくまでも蔵開・上巻

国譲・上巻・六五二頁

は、

0 仲忠に白羽の矢を立てているが、それはあくまでも、 秘琴の継承者であることに起因していた。 たとえばあて宮の入内後、正頼夫妻は、さま宮の結婚相手として 彼が俊蔭一族

でもせさせむ』と思ひつれ。 宮、「さまこそ、劣らず生ひ出でためれば、それをこそものすべ 御心とどめて、 藤中将にこそ、 物のたまふにこそあめれ。 娘 人取らせて、 おとど、「上も、 子出で来ば、 と思ほし

として挙げられる。 にもかかわらず、 秘琴を引き込みたがっているかが、やや唐突なまでのこの会話 これまで、 そのような目論見が夫婦間で語られたことはなかった 仲忠は琴の名手であるがゆえに、正頼家の婿候補 正頼夫婦がいかに仲忠の琴、 (沖つ白波巻・四四六頁) ひいては俊蔭一

5 局、この目論見が実を結ぶことはなく、 るという点にこそ、 一の宮が降嫁することになるが、先の正頼の言葉によれば いもまた、 知られよう。つまりこの時点での仲忠は、秘琴の継承者であ 思ひのやうに教へられたらむ喜びも、今は、 さりとも、ここにこそはせめ。いとうれしく、 俊蔭一族の秘琴にあるらしい。実際、 この手のとまるこそ本意叶ふ心地すれ。 存在意義を認められる人物だったと言える。 仲忠のもとには朱雀帝の女 帝自身も後に、 かくなりたり の宮 帝の 結 ね の

移したらむは、 うつくしきことかな。尚侍のとどめらるる手なめるを、皆弾き 習ひ給ひてむ」。 と思ふやうなるべきかな。さても、いつばか 楼の上・下巻・八九〇頁 楼の上・上巻・八五七頁

と語っており、正頼の読みが外れていなかったことが明らかになっ

0

族の秘琴の継承者なのでらり、そとなった。ハー・・・たがって、蔵開・上巻以前の仲忠はあくまでも、たがって、蔵開・上巻以前の仲忠はあくまでも、 き上げている点は、肯んじがたいのである。 ばともかく、 ついて言えば、これらを政治性の出発点と捉えるに留めるのであれ 忠に娘を嫁がせたがっていたことは、 ている。 の秘琴の継承者なのであり、俊蔭巻での弾琴や神泉苑での競演に 正頼と朱雀帝が、為政者ではなく秘琴の継承者としての仲 柳氏が「時をえた為政者」の弾琴という段階にまで引 明白と言わねばなるまい。し 芸の人間、俊蔭

止する遺言が、仲忠の政治性によって崩されたことを示す表現であ

対する仲忠の「いと易きこと」の表現は、

俊蔭一

族の秘琴披露を禁

また、氏は、仲忠が秘琴伝授完了後の秘琴披露を容易に引き受け

(楼の上・下巻・八九九頁)ことについて、「この秘琴披露に

なっているからである。 おらず、まさに氏が指摘している通り、 られる。 をえた為政者」による「君子左琴」の体現とすることも、 「主催する姿へと変貌する」と論じるのであるが、これをもって「時 今まで、 なぜなら、この時の仲忠は既に芸の人間として君臨しては 秘琴披露を躊躇していた仲忠の姿も積極的に秘琴披露 秘琴披露を主催する人間 やはり

れる。仲忠の弾琴場面(夋鋈笄・耳・エサン、をシュルシート・・・・・を考えら彼はいぬ宮誕生の瞬間から、琴との距離を置きつつあったと考えら彼はいぬ宮誕生の瞬間から、琴との距離を置きつつあったと考えられる。 についてもやはり、 上・下巻・九○五頁)を見ていくと、 四四八頁、 六○頁、春日詣巻・一四五頁、吹上・下巻・二九○頁、沖つ白波巻 弾琴が皆無になっていることが確認できる。 るのである。 仲忠は、最後まで琴の継承者として存在し続けたわけではない。 蔵開・上巻・四七五頁、 蔵開・上巻以降には演奏場面が格段に減少して 楼の上・下巻・八八七頁、 いぬ宮の誕生を境に、 また、 琴以外の楽器

意識した上で、 るのであるが、この不可解とも言える行動は、 た仲忠の行動は、 この動きは世間の噂や評価を意識した、 に託した。そして彼自身はそれを演出する側に回ったのであるが、 のであると言えよう。 結局仲忠は、 彼の目論見の一環でもあろう。 世間に披露する性質のものではない。 この機会に世 いぬ宮への秘琴伝授も、 それまでの俊蔭一族の論理から決定的に外れて 本来、 間の注目を俊蔭一 秘琴伝授はあくまでも家の中の出来 政治的な要素を強く有した 自ら行うことなく俊蔭の 族に集めておこうと いぬ宮の春宮入内を それを敢えて行っ 娘

に背負わせるのは適当でないと思われるのである。 というものに他ならないのであり、それは「君子左琴」本来の「常というものに他ならないのであり、それは「君子左琴」本来の「常というものに他ならないのであり、それは「君子左琴」本来の「常というものに他ならないのであり、それは「君子左琴」本来の「常というものに他ならないのであり、それは「君子左琴」本来の「常というものに他ならないのである、「常を利用して政治性を高める」のまり、仲忠の行動はあくまでも、「琴を利用して政治性を高める」のまり、仲忠の行動はあくまでも、「琴を利用して政治性を高める」のまり、仲忠の行動はあくまでも、「琴を利用して政治性を高める」のである。

第三節 「君子左琴」のずらし

奏に過ぎないこの琴は、俊蔭一族のそれには程遠かろう。 ここ二頁)、これは藤英の詩に合わせたものであった。あくまでも伴は、終ぞない。彼は一度限り、単独で琴を奏でているが(祭の使巻・は、終ぞない。彼は一度限り、単独で琴を奏でているが(祭の使巻・で反し、正頼と音楽との関わりや、その技量が詳細に語られることが、芸の道にも通じていたことが窺われる。だが実際にはこの記述ず、芸の道にも通じていたことが窺われる。だが実際にはこの記述が、芸の道にも通じていたことが窺われる。(藤原の君巻・六七頁)

仲忠の琴を正頼が所望し、人々の関心をその琴へと向けるという点

正頼と琴との繋がりはむしろ、

なかなか耳にすることのできない

にこそ認められる。

てて、 なほ、 かで、 のおとど、 内響き満ちていみじきを、遺言の曲の三つを、声の限り掻き立 よろづの人、興じ愛で給ふ。ただ少し掻き出でたる、おとどの れば、なつかしくやはらかなるものの、いとめづらかに面白し。 御前にて弾きしよりもいみじう、この声もたうへきて習ひ来た ほのかに掻き鳴らして弾く時に、……仲忠、例の曲の手をば弾 左大将、 面白きこと限りなし。いまだ、仲忠、かやうに弾く時なし。 弾き給ふに、いとど、 少し細かに遊ばせ」と、切にのたまへば、調べ変へて弾 思ひの物を弾く時に、「かくては、 それを奉らむ」とのたまへば、 「正頼が、 ましてあはれがり愛で給ひて、 『らうたし』と思ふ女の童侍り。 ありとある人愛で惑ひて、左大将 からうして、 御禄もいかがはせむ。 御衵一襲を脱ぎて、 (俊蔭巻・六〇頁) 今宵の御禄 万歳楽、 害

正頼は宴の折に、仲忠に弾琴を命じる。仲忠はそれを一旦拒否す。を持たいの事実も、その琴の価値を皆に認識させるための治言を仲忠の事実も、そこにはある。正頼と琴との関係は、人々中忠に弾琴を命じたことによって、その琴の素晴らしさが人々に認められることがないのである。人前でのまでも秘されたという事実も、そこにはある。正頼と琴との関係は、人々の注目を仲忠の琴へと集め、その琴の価値を皆に認識させるための注目を仲忠の琴へと集め、そのというないのである。人前でのの注目を仲忠の琴へと集め、そのというないのである。仲忠はそれを一旦拒否するが、結局はあて宮との場合という点にこそあったと言えよう。

独奏ではなく、他者との合奏であった。る場面は決して多くはない。しかもその大半は、俊蔭一族のようななお、琴以外の楽器に目を向けた場合にも、正頼が楽器を手にす

び給ふ。面白きこと限りなし。 (俊蔭巻・六〇~六一頁)はせて、仲頼・行正、笛吹き、ある限りの人、拍子合はせて遊声を出だして、遊び興じ給ふ。……左、右の大将、御琴ども合行正琵琶、大将大和琴、皆調べ合はせて、ある限りの上達部、

仲忠笙の笛、

行正ただの笛、

仲頼篳篥、

あるじのおとど大和琴、

結び垂れ、 おはしまして、御遊びありて、 馬寮引きて、限りなく遊びて出で給ふ。 (祭の使巻・二〇八頁) おとど、「切に、 く遊び給ふ。 右大将琵琶、 H 御物語し、御琴遊ばし、方々の男君たち、おとども、 御衣の尻走り引きて、 兵部卿の親王箏の琴、 興あることかな」とて、 方々より、 笙の御笛取りて、右近の右の 同じ声に調べて、 嵯峨の院巻・一八二頁 御佩刀の緒したたかに 興ある物ども、 いとにな けう

とのたまひて、笙の笛を奉り給ふ。おとどは、皮笛を遊ばす。とこそ聞き給へけるに、物一つ遊ばせ、仕うまつりて、試みむ」生ひの恐ろしかりしかば。耳はすばりにしを、今宵は、『鼬の間』かくて、おとどの、御笛・御琴ども遊ばせば、……おとど、「後

らに調じて参り給ふ。

(菊の宴巻・三〇五頁)

正頼の演奏はあくまでも、他者と共に場を盛り上げるという役目をかが窺えるのみであり、正頼個人の技量については知るよしもない。これらの描写からは、合奏が全体としてどのようなものであった(国譲・中巻・六九四頁)

えられる。 る場を持たない、あくまでも政治面でのみ活躍する人物であると考へる」と語られているにもかかわらず、実際にはその能力を発揮す担ったものに過ぎないと言えよう。彼は、「遊びの道にも入り立ち給

頁、国譲・上巻・六六三頁)、その腕前は、
・でで、九女あて宮が琴の名手とされている。彼女は琴をたびようにして、九女あて宮が琴の名手とされている。彼女は琴をたびようにして、九女あて宮が琴の名手とされている。彼女は琴をたびようにして頼家では、音楽全般との繋がりが薄い正頼に代わるかのただし正頼家では、音楽全般との繋がりが薄い正頼に代わるかの

この族の手弾き給ふべき人はものし給ふ。……』。は、いとよく習はし奉りてまし。この世には、そこにのみなむ、は、いとよく習はし奉りてまし。この世には、そこにのみなむ、

など、 時に、 引き替えに、音楽から遠ざかっていった人物と言えよう。 が が る前に一度、 0) そのあて宮も、入内後は琴の名手としての側面を失っていく。皇子 琴の継承者たる仲忠によって語られるほどであった。しかしながら :所々に存在するばかりである。彼女は、入内という政治的要素と 母という要素が強調され、 (国譲・上巻・六六三頁)、その他は、過去の演奏を回想する場 彼女は楽器を手にしなくなるのであった。立坊争いが激化す 奏法が俊蔭一族と似通っていることが、まさに俊蔭一族の秘 彼女は女一の宮らとの合奏において琴を演奏している 政争との関わりが濃くなってくると同 줆

い。「時をえた為政者」正頼は、琴のみならず楽器全般においてそしたがって仲忠同様、正頼家においても、政治と音楽は並び立た

な

|国譲・上巻・六六〇頁|

である。「時をえた為政者」の琴を体現する人物であるとは、到底言い難いの「時をえた為政者」の琴を体現する人物であるとは、到底言い難いのて宮でさえ、政治的局面に対すると琴から遠ざかっている。彼らがの技量を語られることがなく、入内前には琴の名手とされていたあ

生することはなかったのであり、その点も考え併せると、 に皇室の存在があったと言える。 が他の追随を許さない確固たる地位を築いてきたことの裏には、 が俊蔭を遣唐使に任じていなければ、俊蔭一族という琴の一族が誕 皇室は、俊蔭一族に琴がもたらされた背景にも存在している。 忠が官位を得る際にも、帝の存在は必要不可欠であった。 によってその価値を高めており、また、弾琴を通して俊蔭の娘や仲 俊蔭一族の秘琴は、嵯峨の院や朱雀帝から曲解をほどこされること 蔭一族の秘琴を理解し、その繁栄を支えるという役割を担っている。 が希薄であったと言わざるを得ない。ただ、その代わり皇室は、 身が楽器を奏でることには重きが置かれておらず、音楽全般との縁 帝・春宮といった、皇位についた人物であるが、 加えて、政治の体現者として無視できないのが、 彼らもやはり、 嵯 峨の院・朱雀 俊蔭 そもそも 朝廷 俊 常 族 自

で、「時をえた為政者」の琴は、何者によっても体現されていないのをえず隠居の君子」となった者の琴が俊蔭によって体現される一方が、にもかかわらず、この物語における「君子左琴」の思想は、「時琴と政治であることについては、もはや異論のないところかと思う指摘できよう。『うつほ物語』を支える柱ともいうべき二つの要素が、語』において、政治と音楽に明確な棲み分けが存在していることが語』において、政治と音楽に明確な棲み分けが存在していることが語」において、政治と音楽に明確な棲み分けが存在していることが語が、これまで見てきた政治性と演奏場面との関係からは、『うつほ物

である。

が価値付け、演出するという形へとずらされていると言えよう。の琴は、君子本人によって体現されるのではなく、惟者の琴を乗の 『うつほ物語』の 室の人間もまた、 く有する正頼は、 ぬ宮の琴を演出する側にまわる。 えていった仲忠は、その変貌と同時に楽器を手放し、俊蔭の娘や 値付ける人間としては機能している。 琴は、君子本人によって体現されるのではなく、他者の琴を君子 もっとも、 一見音楽と無関係に見える為政者も、 俊蔭一族の秘琴を価値付けるという役割を担う。 「君子左琴」の 仲忠の琴を世に知らしめるという働きを持ち、 一面、すなわち「時をえた為政者」 物語全体を通じて政治要素を色濃 芸から政治へと活躍の場を変 琴や演奏者を価 皇

第四節 男たちの対立回避

あ 正 立しないということには、 を前提に成り立っていたのであって、政治性を帯びた彼が正頼と対 関係だが、この関係はあくまでも仲忠が芸の人間であるということ 認める正頼が彼を婿として欲するなど、 抗し得る政治家へと変化していった。 る 人間であるからして、その関係は一筋縄ではいかないはずなので |頼の孫娘を妻にしているとは言え、両者はそれぞれ異なった氏族 仲忠は蔵開・上巻以降、 必ずしもならないのではないか。 為政者としての一面をもって、正頼に対 かつては、 至って良好であった両者の 仲忠の琴の才能を 仲忠が

源氏対藤氏の対立構図を背負った立坊争いにおいてさえ、両者の間しかしながら、彼らの関係が決定的に悪化することは、終ぞない。

の動きを耳にした仲忠の反応は、非常に素っ気ないものであった。 の宮は、 を推す態度を示さなかったことに起因している。 に緊張は走らないのである。それは主に、仲忠が異母妹梨壺の皇子 思ひ疎まれむも、苦しうなむ。ただ、后の宮ののたまはむ、 殿の御ためにやごとなきことなり。それによりて、侍らむ所に いかなるべきことにか侍らむ。 給へ。非常と見ることも侍らば、 藤氏繁栄のため梨壺腹皇子を立坊させんと奔走するが、そ 仲忠は、 いとよきことなり」 いかでか取り申さむ。 兼雅の姉である后 奉

和を上位に置くのであった。 たいというのである。仲忠はあくまでも、政治的算段よりも家庭平 との対立を引き起こすことになる。それは女一の宮との関係上避け ることによっていた。大々的に梨壺側につくことは、すなわち正頼 それは彼自身が口にしているように、妻女一の宮が正頼の孫娘であ 異母妹、 うと言い、后の宮の動きを敢えて阻止することはないが、さりとて 梨壺腹皇子が立坊するのであれば、それはそれで良いことであろ ひいては藤氏のために自ら奔走することもないのである。 (国譲・中巻・七〇八頁)

あて宮に反目する意志のないことを、女一の宮を通して明確にしよ 対立するリスクを感じ取ったものと思われる。だからこそ、 ただ、それ以上に彼は、あて宮の勢力を目の当たりにし、 ら御覧ずらむ。御即位に参りて侍りしままに、院の、 知りて侍らむやうに聞き給へらむがいとほしきこと。 宮に聞こえ給ふ、 「世に、人の言ふなることは ここにも かく旅に おのづか 彼女と 仲忠は

> る。 と思われる。 リットを天秤に掛けた、極めて冷静な計算も、そこには働いていた 否めないが、それ以上に、目先の栄光にとらわれずメリットとデメ Ł 加担せず無関心を決め込むことこそが、最良の道であったと言え 自分が、 だが、彼の強かさは立坊争い終結後に絶頂を迎える 源氏と藤氏の板挟みとなった仲忠にとっては、この際、どちらに かつての想い人との対立を避けたいという心情があったことも 「いと恐ろしくもありけるかな」と。 ともぞ思し出づる」と聞こえ給へば、見給ひて、大宮なども、 頼み聞こゆることも、なほ侍れば。『うたてある心も持たる者ぞ』 ふ、「かくも聞こゆまじけれど、 で侍る」とて、 することなむありける。『さる心も思ひ知れ』とて、 きもせで侍りつる。ある所より、 にもかしこにも、限りなく思う給へ嘆きて、誰も誰もまかり歩 「先つ頃、世の中にあやしきことを申しけるを、卑下せる所に、 よしを、一所に御覧じてば、罪には当て給はじ』とてなむ。……」 おはしますだに参らず、三条にもまからで侍るは、『知り侍らぬ にて侍りし、『こと定まりて御覧ぜさせむ』とてなむ、 この君して、 宮の御文を奉り給ひて、 国譲・下巻・七九一〜七九二頁) 昔の心ざし失はず、今、 かの三条に、 (国譲・下巻・七六八頁) とかくのたまは かの宮消息 まだ失は 行く先、

か。その点を、仲忠は自らの伯母を売ることによって証明している。 藤氏でありながら源氏にとっていかに安全な人間である

『いかに思う給ひたらむ』と、聞こし召しけむことをなむ、ここ

対する、 同族の謀をも源氏側に暴露することで、彼はいわばあて宮や源氏に 忠誠心にも似たものを示すのであった。

とも、 氏の対立は避けられているのである。 は、一種の藤氏懐柔とも捉えられようが、ともかくあて宮と仲忠が 敢えて藤氏の仲忠に教育を任せたいという意志を示した。この動き かった。たとえば、涼に皇子の教育を託して源氏の結束を固めるこ 皇子の教育を任せるにふさわしい人物は、必ずしも仲忠のみではな 第一皇子の教育を仲忠に依頼しているが は見受けられない。立坊争いが本格化する直前、 たとえ外見上であろうとも協力体制を築くことによって、源氏と藤 他方、あて宮の言動にも、この政争を通して仲忠を敵視した様子 あて宮には可能だったはずである。にもかかわらず、彼女は (国譲・上巻・六四一頁)、 あて宮は、 自らの

態度を見せている。 また、この政争においては仲忠のみならず兼雅も、非常に奇妙な

昔なりせば、 そこの御子ならむからに、この筋の絶ゆべき」とのたまへば、 ものし給はずや。内裏のは、御妹にはあらずや。など、 おとど、「うたてあること。 『必ず、異筋』とも思ひ尽くらむ。院の后の宮は、そこの筋には 「『後生ひ』と言ふことのあれば。などて、わが孫にこそあれ 何の疑ひは」などのたまふ。 かけても、え言ふまじきことなり。

子侍り。またもあるやう侍なり。かくのごと、手を組みたるや てかしづき侍る人につきて侍り。 「……仲忠の朝臣、 かの家に侍らねど、あるが中の君にして、 |国譲・上巻・六七〇~六七一頁| 子に、限りなく愛しうする女

> する。 を妻としている忠雅は、妻との関係を良好に保つため、 この兼雅の消極的な姿勢は、 煮え切らない態度によって、 無関心を決め込むことで対立を避けたのと同じように、兼雅もその の対立は源氏対藤氏という構図を明確にするものであるが、仲忠が 据ゑずは据ゑず」とまで言い放つ態度は、投げやりでさえある。本 を次期春宮に推そうとする姿勢はまったく見えず、むしろ「坊をば、 だと言うのである。それに加え、女一の宮を介した仲忠と正頼の縁 とであり、今さら梨壺腹皇子に期待をかけるのはとんでもないこと 梨壺腹皇子の立坊を期待する女三の宮の言葉を、兼雅は強く否定 正頼対仲忠、またはあて宮対仲忠の場合と同様に、正頼と兼雅 まふが、恐ろしく、かしこきこと」 据ゑずは据ゑず。 おとど、「大将を、な見そ」とのたまひつるに驚きて、「坊をば、 奉るべきにも侍らず。……」 娘どもをも取り放ちて、 侍るに、『かかることをなむあひ定むる』と聞き侍りなば、 うに行き交じり、この中に、いささか疎かならず、 彼にとって、あて宮腹皇子の立坊は既に決定したに等しいこ 兼雅を政争から遠ざける要因の一つとなっていた。自身の孫 大将を、疎かには、 対立を回避するのであった。加えて、 兄忠雅にも通じていた。正頼の六の君 帝にも、 かれこれにも、またあひ見せ (国譲・下巻・七六六頁) いかが思はむ。 |国譲・下巻・七四七頁| 后の宮の望 命を限りて かくのた

故も、

「さぞかし。女なるおのらだにこそ、 筋の絶えむことは思へ。 ぬ 宮を激怒させる。

むような行動は取らないのである。

彼らのこの態度は、

梨壺腹皇子立坊に躍起になってい

いる后

それにまさりたらむ人をも、おのれ奉らむ。……」る大いなることの妨げをばなさるる。世の中に、女はなきか。したちは、何のなり給ひつればか、『女の子、愛し』とて、かか

(国譲・下巻・七四八頁) 、藤氏を代表して動いているのである。 (国譲・下巻・七四八頁)、藤氏を代表して動いているのである。 (国譲・下巻・七四八頁)、藤氏を代表して動いているの言動には、たしかに と (の) で (の) で

七二七頁)、その一方で正頼は、として正頼もまた、あて宮の存在ゆえに、自らあて宮腹皇子立坊させるよう、春宮に圧力を掛けるようになるが(国譲・中巻・足な返事をせず、時に無視を決め込むという形で、自身の第一皇子 にっため奔走することが避けられている。あて宮は春宮からの文に満のため奔走することが避けられている。あて宮は春宮からの文に満りて正頼もまた、あて宮の存在ゆえに、自らあて宮腹皇子立坊

(国譲・中巻・七○四頁)我は、馬に交じりたらむ牛のやうにて、何ごとをかは。……」が、必ず、さ思すならむ。后・大殿、大臣・公卿たち、心を一ば、必ず、さ思すならむ。后・大殿、大臣・公卿たち、心を一ば、必ず、さ思すならむ。后・大殿、大臣・公卿たち、心を一ば、必で、された。おとど、「空言にあらじ。内裏の后、いとおぞく、「かのことは」。おとど、「空言にあらじ。内裏の后、いとおぞく、「かのことは」。おとど、「空言にあらじ。内裏の后、いとおぞく、「かのことは」。おとど、「空言にあらじ。内裏の后、いとおぞく、

と、ひたすらに弱気な態度を見せている。あて宮の強かさとは対昭

回避されていると言えよう。回避されていると言えよう。の決定的な関係悪化は、あて宮と后の宮という女たちの存在ゆえに、の決定的な関係悪化は、あて宮と后の宮という女たちの存在ゆえに、の決定的な関係悪化は、あて宮と后の宮という女たちに代わり后の宮めに、正頼はこの重要な局面で、為政者としての動きをまったく見的に、正頼はこの重要な局面で、為政者としての動きをまったく見

う構図が女たちによって体現されることで、 ずらされているのである。 隠れする摂関体制とは一見矛盾するものであるが、 に起因すると思われる。 までもが実質的に蚊帳の外に放り出されているのも、まさにこの点 て仲忠が積極的な態度を示すことは終ぞない。 は仕組まれているのであり、 それを二重写しにする形で、あて宮腹皇子と梨壺腹皇子の立坊問題 つて后の宮は、正頼家の長女仁寿殿女御と皇子の皇位継承を争った。 后の宮と正頼家の女は、これ以前にも政争を繰り広げている。 この構図は、 この争いにおいて、正頼や兼雅、 后たちの裏に父の存在が見え 男たちの対立は巧妙に 皇子の母である梨壺 源氏対藤氏とい そし

第五節 次代への足掛かり

て音楽と政治が両立することはないのであり、仲忠はもはや、芸の治的立場に身を置いていくのか。先述したように、この物語においた為政者」としての力を付けつつある仲忠は、今後、どのような政た立場を取っているのであるが、いぬ宮誕生以降ようやく「時をえた立場を取っているのであるが、いぬ宮誕生以降ようやく「時をえープロの場所の男だちはこのようにして、立坊争いから一歩引い

いが決着を見た直後の、間として梨壺腹皇子を擁立することを頑なに拒んだ。実際、立坊争人間ではない。にもかかわらず、立坊争いに際して彼は、藤氏の人

で、からき目を見つるかな」とて、内裏へ急ぎ参り給ひぬ。崔院、ひがひがしきやうに思されき。三条に、はた、えまうで大将、聞き給ひて、「このことにより、頭を、えさし出でで、朱

もなかったのであろう。この面倒な政争が終結した後、彼が足取りのように噂されることは、事実、仲忠にとっては迷惑以外の何物では源氏の勢力を目の当たりにした時分から仲忠が貫いてきたスタンは源氏の勢力を目の当たりにした時分から仲忠が貫いてきたスタンスであり、彼は、その勢力に敢えて対抗する気は毛頭ないのである。スであり、彼は、その勢力に敢えて対抗する気は毛頭ないのである。という仲忠の言葉は、単なるポーズではなく、彼の偽らざる本音でという仲忠の言葉は、単なるポーズではなく、彼の偽らざる本音でという仲忠の言葉は、単なるポーズではなく、彼の偽らざる本音でという仲忠の言葉は、単なるポーズではなく、彼の偽らざる本音でという仲忠の言葉は、単なるポーズではなく、彼の偽らざる本音でという仲忠の言葉は、単なるポーズではなく、彼の偽らざる本音でという仲忠の言葉は、単なるポーズではなく、彼が足取りのように関うにないのである。

へと赴いている。 藤氏の結託ぶりを問い詰める女一の宮を巧みにかわし、仲忠は水尾藤氏の結託ぶりを問い詰める女一の宮を巧みにかわし、仲忠は水尾むものと言うより他ない。しかも、立坊争いが佳境を迎えた時期、この態度は、為政者としての動きから完全に逆行した、矛盾を孕へと赴いている。 軽く内裏へ向かったのも道理である。

を、花盛りにも、とかく障りてものせずなりにしを、この頃、去年より、『水尾に、山籠り訪ひにまからむ』と言ひ契りて侍るべて、このこと、なのたまひそ。さらに知り侍らず。さるは、宮、「皆集はれてこそ定められけれ。知らず顔にも」。大将、「す

『紅葉の散らぬ前に』とてまかり出で立つなるを、一、二日侍ら

ざらむほどの後ろめたければなむ。……」

そのまま物語るものであろう。然さは、立坊争いの煩わしさから逃れようとする仲忠のねらいを、然さは、立坊争いの煩わしさから逃れようとする仲忠のねらいを、この切迫した時期をことさらに選んで水尾を訪問するという不自

相談を持ちかける。 相談を持ちかける。 相談を持ちかける。

こに、 承れば、 とうれしきことなむ。 母君に預け奉りて、 親は頼りなく侍れば、『いかでかは』とてなむ」。大将、「『い 『童部は、 もにこそは』と思ひ給へてなむ。 なむ。この侍る童部も、母とて侍る、身一つだに侍りがたげに 山籠り、「さだに御覧じなさば、 え候はじ。『今居給はむ春宮に奉らむ』となむ」。 いかにせむ』とか思ほす。せむやうをのたまへ。かの叔 『ここに召し集めて、 いかで、宮仕へも仕うまつらせむ』と思ひ給ふれど、 一向にこのことを後見奉らむ」。「さは、い 昔だに、 松の葉をも、 いと御前に候ひがたかりし上に いとうれしく、『仏の御徳』と 女子をさへものして侍るを、 苔の 衣をも、 づ

あり、 頼の妹に預けた上で自分が面倒を見ようと申し出るのであった。 の意見を請う。 は入内の後ろ盾として頼りにならないという判断のもと、彼は仲忠 の執着を残した人物であると言えよう。然るに、 袖君の入内を躊躇した実忠 内させる望みを捨てていない。その姿は、 自らが世捨て人同然になっているにもかかわらず、 仲頼は世俗的な摂関志向を捨てきれずにいる、 すると願ってもないことに、仲忠は、 (国譲・下巻・七九三頁) とは対照的で 周囲から勧められても娘 自分のような親で • 下巻 • 七七六頁 いわば俗世へ 仲頼の娘を仲 仲頼は娘を入

るのである。

扱うことは、 二人になったとは言え、 のライバル的存在に他ならないのである。春宮に差し出し得る娘が あるのに対し、仲頼は源氏であり、仲頼の娘はあくまでも、 ても悪い話ではないようである。だが、彼が仲頼の娘をそのように 后を出す可能性が倍になったという点で、一見すると、仲忠にとっ いで入内させることが可能になったという事態は、 ていると考えられる。その状況で、 到底考えられ 方では仲忠自身もまた、 実際にはあり得ないと思われる。仲忠が藤氏の人間で ない。 仲忠が、 娘いぬ宮の次期春宮入内を視野に入れ 他氏の娘を実の娘と同格に扱うと 仲頼の娘をも自らの娘同様の扱 仲忠のもとから いぬ宮

彼の姿は、いささか滑稽でもある。しかも、仲忠に託されたのは仲の選択をしたと考えられるが、そのリスクに気付かずひたすら喜ぶ頼は梨壺腹皇子立坊の噂を信じ、藤氏の権力掌握を予測した上でこライバルの芽を事前に摘み取ることに成功していると言えよう。仲つすり仲忠は、仲頼の娘の将来を託されることにより、いぬ宮の

一時をえた為政者」でありながら、

その権力から突き放された形で

うライバルの芽を摘むと同時に、利用できる男子をも手中に収めて養父たる仲忠にとって有益に働く。仲忠は、後に邪魔になるであろの座を争う女子の入内の場合とは異なり、多勢であればあるほど、頼の娘だけではなく、息子たちも同様であった。男子であれば、后頼の娘だけではなく、息子たちも同様であった。男子であれば、后

したがって、政争から逃げ出すかのようにして行われた水尾訪問したがって、政争から逃げ出すかのようにして行われた水尾訪問したがって、政争から逃げ出すかのようにして行われた水尾訪問したがって、政争から逃げ出すかのようにして行われた水尾訪問したがって、政争から逃げ出すかのようにして行われた水尾訪問

たのであり、 を正頼邸に惹き付け、 なったはずであるが、ここに至っても正頼の栄華はさほど描か 皇子が立坊したことにより、 頼については、 に近づきつつある。 (蔵開・下巻・五九二頁)、正頼邸の解体 のである。 あて宮の入内、 正頼を取り巻く状況ははかばかしくない。 政治の視座を次代の仲忠へと動かしていくのであっ 物語は、 正頼の存在意義は、 陰の部分が見え隠れするようになっている。 だがそれと逆行するように、 相次ぐ皇子の誕生と、 世間の噂を作り上げた、その一点にこそあっ 正頼に与えられた権力から目を背けるかのよ 正頼の政治的立場はより強固なものと あて宮求婚譚によって数々の男性 (国譲・上巻・六二三頁) 正頼は摂関的権力に着実 春宮との関係悪化 結果的にあて宮腹 ñ

たはずの

その一方で、

典型的な為政者として存在感を放ってい

暗は、 描 ないところである。 ているのであり、 ではあったが、その裏で彼は、既に次代を睨んだ動きを活発化させ 源氏の勢力ゆえに、当面は大人しくしておくことを決め込んだ仲忠 めぼしい人物がいないという点も、その現象に拍車を掛けていよう。 た為政者」として君臨するようになることは、 かれる正頼。 言うまでもない。 次代への足掛かりを着実に築きつつある仲忠との明 今後、 藤氏の仲忠が源氏の正頼に代わり、 正頼の息子たちの中に、将来を期待される もはや疑いの余地の 「時をえ

第六 節 お わり

るのであった。

るのではなく、他者の琴を価値付けるというずらしが潜んでいるの し得ないのであり、「時をえた為政者」の琴には、 よって体現されているものの、 のうち、 政治と関わる君子の動きを探ってきた。「君子左琴」の抱える二面性 以上、 作中には存在しない。この物語において、 「時をえず隠居の君子」となった者の琴については俊蔭に 『うつほ物語』 における「君子左琴」の様相を押さえた上で、 「時をえた為政者」の琴を体現する人 政治と音楽は両立 自らが楽器を奏で

である正頼の対立は、避けられないものであるように思われる。 として君臨する場を失っていく。仲忠は為政者として生きる人物へ いぬ宮誕生後、為政者の側面を強めていくに従い、 変貌を遂げているのであり、 そのため、 俊蔭一族の秘琴の継承者として存在していた仲忠も その意味では、 藤氏である彼と源氏 自身が芸の人間

> れぞれの家を代表する男たちが表立って対立することは、 前面に押し出されることで、 避けるという選択を下したことにもよっているが、 中の女たち、 父兼雅と正頼との関係もまた、 ていた。 だが実際には、 それは、 両者の関係が悪化することはなかった。それば 無論これは、 すなわちあて宮と后の宮によって作られたことに起因 源氏対藤氏という対立構図が彼ら男たちではなく、宮 立坊争いという家の問題を孕んだ政争におい 仲忠や兼雅があて宮の勢力を認め、 正頼や仲忠、そして兼雅といった、そ 仲忠の場合同様に悪くなってはい 女たちの対立が かりか、 回避され 仲忠の 対立を 、てさ

L

には利用価値のある男子を得ることに成功しているのである。 手中に収めることにより、いぬ宮のライバルの芽を摘み取り、 心を決め込んだ仲忠であったが、 代を担う人物としての力を強めつつある。 仲忠は、目の前にある権力、つまり梨壺腹皇子の存在にぶら下がっ しかし、 あて宮の権力には一目置いている仲忠も、 彼は水尾訪問で仲頼の子供たちを 目先の立坊争いには その裏では次 さら 無関

に加え、 そして有能な男子の確保。 認識されているにもかかわらず、 似的息子をも手に入れることになる。その姿は、 的無関心を意味するものではなく、 た栄達には興味を示さなかった。だがそれは、 と向けられていたことを示すものである。この仲頼家の取り込み つある正頼とは対照的である。 仲忠は後に、異母弟小君や、 芸の人間から為政者への変貌を遂げた仲 あて宮の入内以来、 彼の関心が、 いぬ宮の春宮入内 かつての乳母の孫という、 すなわち仲忠の政治 世間から為政者と 目先ではなく次代 実質的権力を

の足掛かりを築いていくのであった。 忠は、源氏との関係をあくまでも友好な状態に保ったまま、次代へ

注

- 1 文大系 礼記 上・中』(市原亨吉氏/今井清氏/鈴木隆一 はあて宮で統一した。 とする。また、あて宮は入内後に藤壺の女御となるが、 称が変化するが、本稿では便宜上、嵯峨の院、 は三度の御世代わりがあるため、院、 によった。本文に付した傍線は引用者による。 氏・集英社・一九八六年九月)、『うつほ物語』は『うつほ物 本文引用については、 、塚本哲三氏・有朋堂書店・一九二〇年六月)および『全釈漢 全 改訂版』(室城秀之氏・おうふう・二〇〇一年一〇月) 漢籍は 『漢文叢書 帝、春宮については呼 古列女傳•女四書 朱雀帝、 なお、作中で 春宮 呼称
- (3)「『宇津保物語』俊蔭一族の琴の両義性 ── 俊蔭と仲忠の予言六四年七月、初出『文芸と思想』二○号・一九六○年一二月)。位相及び教養よりみたる物語の形成 ──』武蔵野書院・一九(2)「琴の家伝と俊蔭一門の造型」(『物語作家圏の研究 ── その
- 二年二月)参照。 関連性をめぐって ――」(『国語国文研究』一四一号・二〇一関連性をめぐって ――」(『国語国文研究』一四一号・二〇一

九九年一〇月)。

—」(『古代文学研究

(第二次)』八号•一九

8

- 思惑──」(『国語国文研究』一三八号・二○一○年七月)参思惑 ──」(『国語国文研究』一三八号・二○一○年七月)参(5) 拙稿「『うつほ物語』俊蔭一族と皇室の距離 ── 琴をめぐる
- (7) 大井田晴彦氏も「「国譲」の主題と方法 ―― 仲忠を軸として代文学研究(第二次)』一七号・二〇〇八年一〇月)。
- や忠こその一家を吸収していく仲忠について、語と国文学』七五―三号・一九九八年三月)において、仲頼――」(『うつほ物語の世界』 風間書房・二〇〇二年、初出 『国

と述べており、首肯すべきと思うが、本稿ではそれに加え、

人徳ゆえに仲忠の周りに人が集まるという平和の裏に、

為政

- (『古代中世文学論考』第二三集・新典社・二○○九年一○月)の世界 ――〈縦の繋がり〉と〈横の繋がり〉の絡み合い ――」拙稿「『うつほ物語』俊蔭一族と宰相の上親子の織りなす血縁出読み取りたい。
- 拙稿「『うつほ物語』源正頼家と皇室 ―― 主導権の逆転と正

9

一月)参照。 ――」(『国語と国文学』九〇―一号・二〇一三年

(とだ ひとみ・北海道大学大学院専門研究員)